Shining ほいく

第３８号　　令和３年１２月２１日
編集・発行　保育サービス課研修担当

『Shining ほいく』は研修の振り返りと実践への活用を目指し発行する機関紙です。
受講での学びをどう実践に活かし保育の向上に繋げていくか、そして他園ではどのように研修内容を活用しているのか等を知り、各職員保育士としての専門性構築に役立てていってほしいと思っています。
活用法①「この間の研修どんな研修だった？」と話す時に参考になる！
②他園で研修をどのように活用しているか知りたい時にためになる！
③保育を見直したい時になるほど！と気づきがある。
そんな紙面を目指しています。

＜今回掲載した研修＞
◇キャリアアップ研修―保健衛生・安全対策
◇乳児の口腔内の発達と離乳食/子どもの発達と食具

◇キャリアアップ研修　『保健衛生・安全対策』　7～8 月（計 5 回）

皆さんの研修報告より　～感じたこと・学んだこと～

【第１回】　令和３年６月３日
保育所における感染症ガイドライン・血液を介して感染する病気を防止するためのガイドライン
＜国立感染症研究所医師＞　多屋　馨子先生

- 様々な感染症と予防接種について詳しく学ぶことができた。大切なことはまず知ること。感染症と予防接種の理解が感染症予防の第一歩であると理解できた。予防接種後はワクチンの種類を理解した上で子どもの体調の変化に留意していきたい。
- 新型コロナウイルス感染症対策としてのマスクの着用は子どもの身体に負担かかることがあるということなので、個々の体調の変化に配慮しながら着用させていきたい。（特に夏場）
- 感染症対策ガイドラインの内容に基づき日々の保育の中で感染症予防に努めることの認識がまだまだ甘いと振り返った。感染症対策ガイドラインにあっていない保育や対応など改めて見直していきたい。

【第２回】　令和３年６月７日　保育所における事故防止＜名寄市立大学特命教授＞　猪熊　弘子先生

- 子どもの『いのち』を守ることは子ども一人ひとり存在を守ること。つまり人権を尊重すること。
- 安全面からも『子ども主体』の保育は大切。子ども一人ひとりの発達や気持ちを理解し考える保育の実践が、おのずと子どもの命を守ることになる。
- ヒヤリの多い子ども・場所があるのでヒヤリハットのパターン分析を行い、事故を起こさないための取り組み（予防）が大切。
- 安全な保育の基本は整理整頓。かかわり方や環境を丁寧に見直していくことが必要。

・重大事故は一人のミスで起きるのではない。みんなの目で見て確認することで防いでいくことができる。（チームで行うということ）

【第３回】　令和３年７月８日　保育所における健康安全管理

＜全国保育園保健師・看護師連絡会会長＞　藤井　祐子先生

・子どもの健康状態を見るポイントや体調不良時の症状別の対応について再確認できた。
・子どもの「何となく変だ」に気が付くためには日々の子ども達の健康状態の把握が大事。子どもからのサインを見逃すことなく異常の早期発見に努めたい。事故やけがについても同様で職員が危険予測をして危機を回避する力をもつことが重要である。適切な判断力と対応力をもつことが求められている。
・災害時の対応については自園の災害リスクを確認する。実際の災害時に職員の役割分担がスムースに機能するような避難訓練を行っていく必要性を再確認できた。組織の体制が重要。
・『ASUKA モデル』のビデオは子どもにかかわる全ての職員がみて共通認識をもたなければいけないと思った。

【第４回】令和３年７月 13 日

教育・保育施設等における事故防止及び事故防止発生時のためのガイドライン

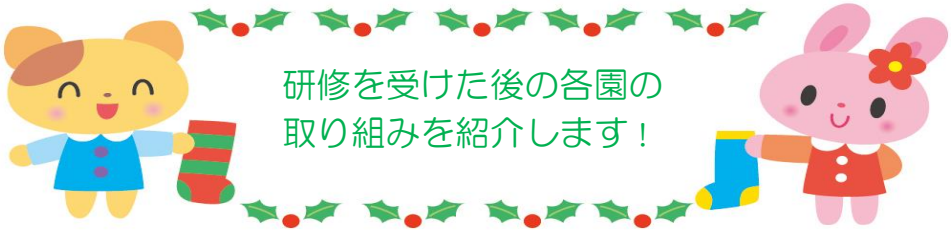
＜全国保育園保健師・看護師連絡会理事＞　高橋　良子先生

・重大事故が発生しやすい場面ごとの注意事項について具体的に学ぶことができた。食事中の誤食や食物アレルギーの危険についても改めて学んだので事故防止していきたい。そのために安全な環境と管理が必要。
・事故防止に向けて組織的に取り組む体制ができ上がっているかが重要。園の責任者、リスクマネージャー、クラスリーダーなど様々な視点から安全管理の仕組みを常に構築していくことが必要。
・乳幼児期の子どもは身体機能や様々な能力が未熟または未発達であることの再確認と具体的内容が理解できた。保育士は個々の発達をしっかり見極めてかかわっていくことが重要。
・ガイドラインを見れば誰もが保育園における安全対策を理解できるものだということが良く分かった。ガイドラインを今一度周知し、事故防止及び健康安全管理に関する組織的な取り組みが必要。そしてヒヤリハット、チェックリストの活用が大切であることを伝えていきたい。
・『ハインリッヒの法則』→1 件の重大な事故、災害の元には 300 件のヒヤリハットがある。→リスクマネジメントの体制づくりを行う。→ヒヤリハットを『分析』『検証』『改善案立案』『実践』『評価』することで重大な事故を防ぐことができる。これらを忙しい日々だからこそ実施する体制をつくることが大切である。

【第５回】　令和３年８月 23 日　保健計画の作成と活用　＜白梅学園大学教授＞小林　美由紀先生

・子どもの身体的な成長と精神的な発達を継続的に把握し、成長曲線による評価やデンバー式発達スクリーニングでの評価を活用することで病気の早期発見や集団における関係性、子どもの行動変化を知ることができる。これらの評価方法を使い保護者に情報提供することで子どもの健康支援に繋げることができると再認識した。
・保健計画は全職員がそのねらいや内容を踏まえ子どもの健康、保持、増進に努めていくことが重要。保健活動の実践に対しては全職員の共通理解を深め、家庭と連携していくことが大切。グループでの話し合いの中で他園の保健計画を比較でき参考になった。

＊＊＊研修内容の活用＊＊＊



高島平つぼみ保育園

「保育施設などにおける事故防止及び事故発生時の対応のためのガイドライン」の研修から、子どもの目線にたって保育環境を考える園内研修を行いました。２人ペアになり、保育園内外をチャイルドビジョンを使って、実際に歩いてみてから環境について考えました。

チャイルドビジョンをかけると「視野が狭い」「上下が見えない」「横に何があるかわからない」「足元が見えない」など子どもの視野を知る体験ができました。

かがんで子どもの目の高さを体験

「階段はこんな風に子ども達に見えているのね」

机の足が危険！
「机の置き方を工夫しないと危ないね。」

「トイレから廊下へ出るとき、子どもの目線だと、危険だわ。」

園内のあちらこちらをまわり、みんなで気づきを出し合いました。

- ビジョンが狭いことで子どものトラブルもおきていることがある。
- 子どもへの声のかけ方も具体的な言葉で言わないとわかりにくい。
- 「ちゃんとみて」ではなく、指差しや動作で知らせることが必要。
- 環境整備することも、子どもたちの安全な環境作りになる。

キャリアアップ研修を受け、実践で園内研修したことでいろいろな気づきができ、環境について考え改善につなげることができました。

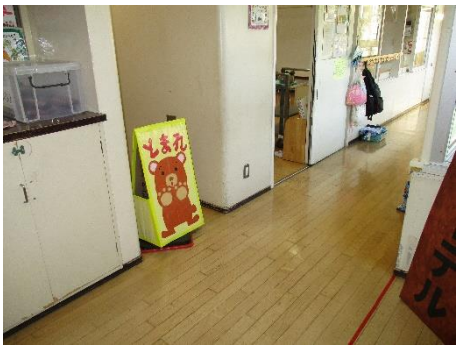
志村橋保育園

◎『死を招いた保育』の事例を忘れず、職員全員が安全に対しての意識をより高くもち保育にあたることを再確認しました。

- 『組織が事故を引き起こす！』その点を念頭に、職員間の連携を更に意識して保育にあたっている。子どもの泣き声に対しても各クラス気にかけた対応を行っている。
- 重篤な事故を引き起こすのは『くうねるみずあそび』。まず睡眠面では午睡チェック用タイマー購入予定。呼吸確認のためのステンレス製舌圧子等、様々な方法を検討中。
- ヒヤリハットをきめ細かく記入し分析する。グット事例も出し合い、保育を多角的に見直している。

西台保育園

子どもの健康と命を守るために必要な内容の研修で、園内でできることを実践してきました。事故防止では園内で研修報告をした後に、「死を招いた保育」の本を職員間で回覧しました。加えて昨年度末に行っている園内の危険個所の確認の再確認と対応を行い、飛び出しの多いＴ字路には立て看板を作り、子どもが目で見てわかりやすいようにしました。また、０歳室のパネルマットの隙間に気づき入れ替えと隙間を埋める対応をしました。



健康安全管理では、補助員さんとおんぶの練習をしたり、熱性痙攣が起きた時のシミュレーションを全体でしたり、健康や安全についての再確認を行いました
おんぶでは保育園が初めての補助員さんだったため実際に経験することでやり方を知ることができました。熱性痙攣の対応も知識では知っているが経験はないという職員もいるため、今後もシミュレーションは行っていきたいと思います。12 月は冬場に向けての下痢嘔吐処理の園内講習（主に補助員さん向け）も予定しています。

子どもの健康と安全を守る大切さを研修を通して園全体で再確認することができました。研修を通して健康や安全に対する意識が高まり、気になっていることや場所などをそのままにせず、できるところから始めていくことで園全体の健康や安全に対する意識も高まったと思います。

◇乳児の口腔内の発達と離乳食　令和３年６月29日　講師－保育サービス課栄養士

参加者の研修報告より　～感じたこと・学んだこと～

- 0、１歳児クラス担当の保育士を対象に子どもの発達に合わせた離乳食の進め方、食具の選び方、介助の仕方などの基本を学ぶことができた。離乳食の進め方で迷う部分があったので、資料と講義を参考に調理師と意見交換をしていきたい。
- 園児の咀嚼力について特に観察し、個別に配慮した対応を行っていきたい。
- 実際に食具を手に取ることで問題点や介助時のポイントを確認できた。食具の選び方、一人ひとりの食べ具合による提供方法について、他職種との連携に活かしていきたい。
- 他園との交流は情報交換に加え、食事の様子や乳児食への移行、どの食具を使用しているか等の意見交換を行った。悩んでいることを共有し大切にすることを確認し合い、とても参考になった。
- 家庭と連携をとりながら子どもに適した食事の提供が大切だと改めて感じた。
- 実際に離乳食を食する体験の中で大きさ固さなどを知った他、介助を受ける子どもの気持ちを感じることもでき、保育の見直しができるよい機会になった。
- 他職種と連携し、個々の様子を共有しながら子どもの発達に合わせた対応ができるよう活用したい。

◇子どもの発達と食具　令和３年11月４日

昭和大学歯学部スペシャルニーズ口腔医学講座口腔衛生学部門　石﨑　晶子先生

参加者の研修報告より　～感じたこと・学んだこと～

- 乳児の口腔内と離乳期の自食機能の発達過程を表や写真を見ながら学ぶことができた。また手指の発達順序と口と手の協調運動の発達や適した食具や食器の説明が理解できた。
- 食具の持ち方については初めて聞く言葉もあったので、年齢や発達に合わせて持ち方を確認して伝えていきたいと思う。クラスに新人職員もいるので丁寧に知らせながら研修内容を共有していきたい。
- 低出生体重児・ADHD・自閉症に対する摂食指導についても学ぶことができた。
- 一人ひとりの子どもの成長発達にあった支援を行うことが基本であり、口腔だけでなく全身や全体の様子を見ることが重要であることが分かった。『離乳期のつまずきは後々まで長引きやすい。早期介入が大切である』という説明から、保育士の果たす役割は大きいことを再認識した。
- 広い視野で子どもの喫食状況を把握し、他職種間で連携してより良い食生活の形成に努めていきたい。また食事に対して悩みを抱えている保護者にアドバイスを行い、必要があれば相談できる機関を紹介していきたい。
- 口腔機能の発達と支援について、離乳期の食べる機能の獲得から就学前までの発達について具体的に学ぶことができた。園内での連携、共有をしながら一人ひとりの子どもの発達に合わせた対応ができるよう活用していきたい。

＊＊＊研修内容の活用＊＊＊

弥生保育園

乳児の口腔機能についての研修活用報告

研修で学んだことを活用し、特に食具と援助について見直しを行いました。

～１歳児クラスのＡさんを例にご紹介します～

食べたい気持ちが強いＡさん。スプーンですくった食べ物をこぼさないよう、左手をスプーンに添えて、どんどん口に入れていました。

≪食具について≫

・柄が太い
・スプーンボウルが浅い
　→握りやすく持ちやすいが、食材が少量しか載らずこぼしやすい

・柄が細い
・スプーンボウルが深い
　→食材がしっかりと載り、こぼれにくく口の中に取り込みやすい

※１歳児クラスでは柄が太いスプーンを使っていました。

研修を受けて…

・上手（うわて）持ちでしっかりとスプーンを持つことができていたので、柄が細いスプーン（写真右）に替えました。
・スプーンに載せる量について、適量になるように知らせています。「ちょっとずつだよ」と声をかけ、一口量を意識して口に運ぶ練習をしています。

その後…

・５か月が経ち、スプーンに添えられていた左手がお椀に添えられるようになってきて、こぼす量が減ってきました。
・一口ずつゆっくり食べることで、「これなぁに？」「きゅうりポリポリ！」など、保育士との楽しいおしゃべりも増えてきました。

5か月後の様子

少しずつスプーンですくったり、左手がお椀に添えられていたり…。Ａさんの食事の姿に嬉しい変化を感じています。

≪研修担当より≫

今年度は「乳児の口腔内の発達」をテーマに大学講師の講義、保育サービス課栄養士の講義と調理実習にて乳児期の発達に合せた食事、食具についての研修を継続して実施しました。
食べる機能の獲得、食具の持ち方の発達、口と手の協調運動の発達など講義内容の理解と実際に食し体験することで、学び、職種間の連携を深め、子どもの成長につながる実践になることを期待します。

各園のご協力、ありがとうございました！　Shining ほいく担当係